

第一章 ウクライナー

第一章 ウクライナー

「ここはウクライナーの首都キープです。たった今ソシアの巡航ミサイルの攻撃でこのシヨツピングモールが炎上しました」

迷彩服を着て取材する若い女性キャスターが取材している。背中には赤ん坊が……。

次の映像が流れる。イリは瞬きもせずに見つめる。両手を縛られて頭を打ち抜かれた老夫婦が路上に倒れている動画に変わる。思わずイリは目を背ける。

「私は英知を失った生命体の暴走を取材するためにウクライナーにとどまっています」

イリはこの女性がウクライナー人であることに気づく。祖国の悲劇を世界中に訴えるために爆発音などを気にすることなくマイクに向かってしゃべりまくる。背中の赤ん坊は泣くことなく目を大きく見開いて母親を応援しているかのようにカメラに支援を向ける。

「生命体の生存競争は熾烈です。でも残酷だと思いますか？」

いつの間にかスタジオからの報道に変わる。ヒナを襲ってくわえる狐や遡上する鮭を捕まえた熊がイクラをうまそうに食べる映像が流れる。

「ライオンがケガをした牛や群れからはぐれたシマウマの子を襲っても、ライオンの視点から見ると当然のことで残酷な行為ではありません」

シマウマの子に群がるライオンの子たちが肉を引きちぎっては食べる。今度は途方に暮れる母シマウマの映像に変わる。ここで先ほどの女性記者、相変わらず赤ん坊を背負ったままで、視聴者に問いかける。

「主役がライオンだと子たちのために頑張る母ライオンを賞賛する。でも主役がシマウマになると『逃げる！』と子シマウマに声援を送りライオンの狩りが失敗すると歓声を上げる。そうでしょ？」

イリはため息をつくと時空間映像装置のスイッチを切る。

ほとんどの動物は同じ種同士で戦うことはない。ましてや大量に殺し合うことはあり得ない。一方人類はとことん戦う。民族主義とか、民族の浄化とか言ってあいてをたたきのめそうとする。たとえば肌の色が違って同じ人間なのに。なぜだろうか。

人間は飢えを凌ぐためだけではなく欲望を満たすために様々な動植物を殺傷あるいは全滅させた。自然を征服すると豪語する人類。無機物から生まれた有機物の逆襲に気付かない人類。

イリは再びため息をつくが所詮イリがいるノロの惑星からは遙かに遠い地球での話。やがて深い眠りにつく。

*

ユーラシア大陸からヨーロッパ大陸。古くからシルクロードという交流路があった。様々な文明が交わる大動脈、いわゆる文明の血管。このシルクロード沿いには数多くの都市が生まれ

ては滅んでいった。いわゆる栄枯盛衰が繰り返されてきた。

栄盛を手にしたものは必ず枯衰する。これが真実なのに権力を握った者は、自分だけは同じ轍は踏まないと異常なまでの征服欲を持つ。有限のみでありながら巨大な欲望にとりつかれる。しかも肉体そのものが栄枯盛衰なのに気付かない。

そして高度な知識や知恵を持たない人類以外の全生命体が栄枯盛衰を悟っていることにも気付かない。脳は飾りに過ぎず人類は無能なのかもしれない。知恵知識を持った脳は英知を發揮できない無能な機関に成り下がってしまったと言えるかもしれない。それは脳をみればよく分かる。決して美しいとは言えないいびつな形をしている。

さて少し前中華民国にイリという自治区があった。その昔、勇猛な騎馬民族であったころ、ユーラシア大陸のほとんどを支配したこともあったイリ族の末裔が住む地域。しかし、栄枯盛衰の言葉どおり広大なタクラマカン砂漠で貧しい村として生きながらえることになった。

ところが、メキシコ湾に開いた大きな穴に大西洋の海水が吸い込まれてこの砂漠にその一部が吹き出すと湖となった。(拙著「トリプル・テンー」を参照)

タクラマカン砂漠はホワイトシー(白海)と名前を変えイリ村は緑豊かな穀倉地帯となった。そして現代版シルクロードの一端を担うことになり中国からヨーロッパを結ぶ鉄道が開通するとイリ自治区からイリ国に昇格して穀物を中華民国やヨーロッパに供給するようになった。このイリ発の列車を近隣諸国の人々は「イリ・ライナー」と呼ぶようになった。やがて国の名前

も親しみを込めて「イリライナー」と改められて中華民国から独立した。

一方、ヨーロッパの入り口手前に大国ソシアを盟主とするソシア連邦に組み込まれていたウクベスタン」という国があった。ブラックシー（黒海）に面した国で穀物を輸出していた。その穀物を運ぶ鉄道列車は「ウク・ライナー」と呼ばれた。その後ソシア連邦が崩壊すると国名を「ウクライナー」と変更した。

*

国の歴史にはいろいろな過程あつて一概には言えないが、得てして大国の権力者はこのような隣国あるいは元自治領の存在を認めない場合が多い。

イリライナー国の女王イリは中華民国の迫害を受けて暗殺されそうになった。このように小国は大国の影響をまともに受けることが多い。

イリライナーからウクライナー間のいわゆるシルクロードに様々な国が存在するが、多くは山岳地帯で耕作地が少ないので食糧事情が悪い。その上信仰する宗教の戒律が厳しいため経済は低迷していた。さらに権力闘争のために政治が不安定で巨大国ソシアの属国、つまりソシア連邦に組み込まれた国が多かった。東西冷戦の末軍事費増大に起因する経済力低下でソシア連邦が崩壊すると自由と豊かさを求める連邦構成国はソシアの顔色を窺いながらヨーロッパに接近した。

独裁者が支配するソシア国民自身も自由を求めたこともあつて数年で宗教戒律が厳しい国や

第一章 ウクライナー

ソシアと国境を接する国を除いてほとんどの国がヨーロッパの一員となった。これを目の当たりにしたソシアの大統領プチレンコンは領土が狭くなることを恐れて周辺国に圧力をかけ始める。

衰えたとはいえ巨大国であるソシアには豊かな天然資源がある。グローバル化した世界経済は持ちつ持たれつの関係になって久しい。激しい競争がある一方、協力しなければ世界経済は成り立たない。言うまでもないが質素に暮らせば贅沢品はいらないからなんとかなるのだが。

独裁者は有限の身なのに永遠の命を持つ神のような行動をとる。要は身勝手な神になる。権力を守るためにはまず一族の重要ポストへの登用。そして身内ほどではないが忠誠を誓う側近が必要となる。権力基盤を盤石にするには此れ等の取り巻きを儲けさせて裾野を広げなければならない。このようにして独裁者は自分を守る城と武器を手に入れる。

そうすると国民は貧しい生活しかできなくなる。不満がたまると弾圧するがいつまでも押さえつけることはできない。自由を求める運動が起こると独裁者といえども安閑としてられない。

そこで領土を拡大するために隣国に攻め入って自国の財力や利益を増やそうとする。国民の不満が高まると屁理屈をつけて戦争を起こし目をそらす。当然攻め込まれた国は抵抗する。

他国の自由を征服するにはかなりのエネルギーが必要だが、独裁者の観点からすると民主主義や自由主義を唱える国は多様な個人の価値観を基礎として成り立つ社会だから結束力が弱く攻めやすいように見える。

第一章 ウクライナー

いわゆる民主主義国家というのは様々な価値観がぶつかり合って統一性がないように見える。しかし、自由という土台は意外にも強固なことに独裁者は気づかない。なぜなら、自由というものは、長い年月をかけて多くの血を流して手にいれたものだから。